

イルゼ・アイヒンガー後期作品における E.M. シオラン引用について

真 道 杉

はじめに

2005年、オーストリア日刊紙 *Die Presse* から毎週土曜日に発行される挿入版 *Spectrum* のコラムがイルゼ・アイヒンガー¹⁾に依頼された。戦後60年、アウシュビッツ解放60年を記念するコラムというのが、その依頼内容だった。

依頼を受けたアイヒンガーは毎日ウィーン6区にある、カフェ・イェリネックに赴きそこを仕事場として、そのコラムの執筆をした。*Subtexte*²⁾として2006年にその抜粋は単行本として出版されることになるが、このタイトルが示す通り、その作品、そして演出されたかのような仕事ぶりには多くの含意を見て取ることができる。

1938年にナチスドイツに併合されたオーストリアからは、当時カフェでウィーン文学を担っていたユダヤ人たちが消えた。それとともに、一つの文学ジャンルも消えた。1980年代後半になって生まれ故郷ウィーンに再び戻って居を構えたアイヒンガーはしばしばカフェで筆をとるようになるが、その中でもこのコラム執筆のためには、敢えてグンペンドルフ地区にある昔ながらの、ほとんど改装された跡のない、観光客とは無縁のカフェを選んでいる。このカフェはまた、アイヒンガー一家が最後に家族で暮らし、双子の妹がそこからロンドンの青年輸送船で亡命するときに住んでいた家のほど近くに位置する。過去の思い出がそのカフェからは自然と湧いてくる、そんな場所である。その場を、アウシュビッツ解放60年記念のコラム執筆の場として選び、コラムのテキスト世界の入り口としても用いている。まさに、19世紀末から20世紀初頭にペーター・アルテンベルクなどが書いたカフェ文学の様式をそのまま現代に再現する形となっており、このコラム執筆のスタイル自体が、消えていなくなってしまったカ

フェ文士をはじめとするウィーンのユダヤ人たちへのオマージュとなっている。³⁾ アイヒンガーは、このコラムを書くことで消えてしまった人たちの日常的な仕事風景を現代に蘇らせ、自らその風景を生きている。

晩年のアイヒンガー文学には死者へのオマージュという特徴が特に強く出ている。現在自分が身を置く場を起点に *Subtexte* のテキスト世界の中では、カフェを訪れる人やウェーター、カフェに置かれている新聞記事や星占いなどアイヒンガーの身の回りにあるものを契機に次々と連想の鎖が伸びて行き、ヒトラー以前のウィーン時代から現代までの時空を縦横無尽につなげて一つのテキスト・コスモスともいうべき世界を紡ぎ出している。テキストの出発点として登場するモチーフは、ほぼ偶発的に出会うカフェの世界の日常であるが、それらと過去の世界をつなぐ重要な役割を果たすのが、作中に頻繁に使用される様々なテキストの引用である。その中でも特にほぼ全てのテキストに引用されているのが、ルーマニア出身の思想家 E.M. シオランのテキストである。このテキスト引用は、モザイクのように散りばめられた様々なテキストモチーフの中で大動脈のように本作品を一つの線でつなぎ合わせる大きな役割を果たしている。また、ランダムで無作為な出会いの集合体のようなテキストに、アイヒンガーが非常に意図的に持ち込んだ要素でもある。最晩年の作品群におけるシオラン引用の重要性についてはこれまでも度々指摘されてきているが、十分に検証されているとは言えない。本論のための調査においても、まだすべての引用が特定することはできず、まだ研究は入り口の段階である。その点を認識した上で、現在まとまった形では存在していないアイヒンガーの後期作品を概観し、さらに現在までの先行研究の状況を考察し、アイヒンガーのシオラン引用について現在までに判明したことをまとめ、さらに今後の課題を提示することが本論の目的である。

1. アイヒンガー後期作品群の概要とシオラン引用の位置付け

前述の *Subtexte* に納められたテキストは、それ以前から書かれていた新聞コラムと共にアイヒンガー後期作品群の一部をなすものである。新聞コラムは 2000 年秋、当時オーストリアの日刊紙 *Der Standard* に勤めていた Richard Reichensperger⁴⁾ の強い勧めにより、アイヒンガーが *Der Standard* に定期的にコラム執筆をするようになったところから始まる。そうして

2005年に体調を崩して執筆を止めるまでの約5年間にわたって書かれたものは後期作品群として扱われている。

当時、1991年にReichenspergerによって編集され、Fischerから刊行された8巻本、*Ilse Aichinger Werke*⁵⁾はすでに「全集」として見なされており、80歳になろうとしていたアイヒンガーは、世間ではとくに引退したものと思われていた。2000年の時点では、ほぼ15年間も作品を発表せず沈黙していた時期があったのである。しかし、発表はせずともアイヒンガーは書き続けていた。⁶⁾公私共にパートナーであったRichard Reichenspergerがアイヒンガーを説得して書き始めさせた最初のコラムは*Journal des Verschwindens*と題され、2001年春までつづいた。80歳になったアイヒンガーがまた書き始めたという事実は、多くの文学者をはじめとした人々に注目されたが、当初はいつまで続くかわからない新聞コラムという軽い形式で書かれていたこともあり、特に高い評価を受けるものではなかった。しかし、それが単行本として刊行されると、研究者たちも注目するようになる。

このシリーズは2001年に*Film und Verhängnis*⁷⁾というタイトルで、Fischerから刊行されるが、そこでアイヒンガー後期作品に特徴的な新聞コラムの短文に加えて、各文章の最後に日付が入る形式が導入される。この形式は、その後刊行されるジャーナル形式のテキストとして、一つのテキスト群としての特徴となる。刊行された版を見ると、日付をつける形式が統一されているので、作品をほとんど発表していない1990年代から、新聞のコラム連載が始まる前のテキスト⁸⁾が混在していることまでわかる。その後、*Der Standard*に新たなシリーズ*Unglaubliche Reisen*が2001年秋から2003年春まで続く。その後、連載はさらにタイトルを変え、*Schattenspiele*として2003年秋から2004年まで続く。

しかし、2004年にアイヒンガーとこの連載にとって大きな二つの出来事が起こる。ひとつは、4月22日のReichenspergerの突然の死である。そして、もうひとつは、Elfriede Jelinekのノーベル賞受賞についてアイヒンガーが書いた*Nobelsonne*を*Der Standard*が掲載拒否した事件である。⁹⁾これを機にアイヒンガーと*Der Standard*は袂を別つことになる。その後、アイヒンガーは同じオーストリアの日報である*Die Presse*から依頼を受け、2005年から本論冒頭部で述べた連載を始めることになる。*Der*

Standard に掲載されたテキストは *Unglaubliche Reisen*¹⁰⁾ として、Fischer から 2005 年に出版され、2005 年から *Die Presse* に掲載されたテキストは *Subtexte* として、Edition Korrespondenzen から 2006 年に出版された。

シオランの引用が突如アイヒンガーのこの後期作品群の中で頻繁に出てくるようになるのは 2004 年の夏以降である。2004 年 4 月 9 日付けで *Für Richard Reichensperger* と題したテキストが書かれているが、これは当時集中治療室にいた Reichensperger のために書かれたテキストである。その後、5 月 7 日付けの *Die letzten Gäste* では、Reichensperger の葬儀の様子が書かれている。このころまでは、シオランの引用は見当たらない。刊行本では次の章にあたる 7 月 9 日付けの *Schattenspiel Radio* において初めてシオランの引用が出てくる。その後のシオラン引用の数は他の作家のテキストと比較しても圧倒的に多い。

アイヒンガーの後期作品に関しては、これまでの論考で、一見ランダムに選んだかのように見える内容が、テキストの持つ重層性の中で緻密に構成され、幾重もの意味を含んでいることを指摘してきた¹¹⁾。シオラン引用に関しては、その数の多さから重要性は指摘されているが、その全容とテキスト引用の手法については、まだ数える程しか論考がない。引用されている箇所についても、現在までの研究ではシオランの原文が特定されていないものが多い。アイヒンガーの後期作品においては、しかしシオランだけでなく、アイヒンガー自身の思い出や、映画、文学、歴史、新聞、クロスワードパズル、身の回りの出来事、などの要素が縦横無尽にテキストの構成要素になっており、テキスト解釈の方法は無尽蔵にある。その解釈の糸口の一つとしてシオランの引用方法を考察することは、他の要素を読み解く上でも一つの指針となるであろう。引用数が多いだけにその手法を分析するのに良い材料となる。

2. アイヒンガーテキストにおけるシオラン引用に関する先行研究

アイヒンガー文学は難解な文学として、全般的に長い間研究がなかなか進まなかった。それが、2007 年にマールバッハのドイツ国立文学アルヒーフ (Das Deutsche Literaturarchiv / DLA) にアイヒンガーの書簡や手書き原稿を含む一次資料が託され、許可を得た研究者たちへ公開されるようになったことで、転機を迎えた。¹²⁾ 折しも、現在までに刊行された最後の

アイヒンガーの単行本 *Subtexte* が出版された直後であり、DLA に託された一次資料の中には、アイヒンガーの幼少期からの家族のアルバムから、2005 年までに書かれた新聞コラムの直筆原稿や Reichensperger や Franz Hammerbacher によって入力された入稿原稿も含まれていた。これらの資料により、アイヒンガー研究はにわかには活気付いた。早くも 2007 年にこの DLA 資料を用いた最初の論集が Roland Berbig を中心とした研究チームにより、アイヒンガー特集を組んだ *Text und Kritik*¹³⁾ として刊行された。これを皮切りにアイヒンガー研究は新たなステージへと入った。Roland Berbig は 2010 年にさらに *Berliner Hefte*¹⁴⁾ でアイヒンガー特集を組み、また 2011 年前後にはアイヒンガー生誕 90 年を記念して、いくつもの研究グループがシンポジウムを開き、論集を編んだ。¹⁵⁾ アイヒンガー自身が 80 歳を超えて新たな作品群を生み出したことも研究者には大きな弾みとなり、生誕 85 年を迎えて以降アイヒンガー研究は活気付き現在に至っている。

その中でアイヒンガーテキストにおけるシオランの研究については、*Text und Kritik* (2007) において、アイヒンガーに直接シオランの本を勧め、Reichensperger の死後彼に代わってアイヒンガーの手書き原稿を入力した Franz Hammerbacher 自身がその経緯を述べている。¹⁶⁾ また、2010 年に刊行された *Berliner Hefte* では、Ildiko Szöke が後期アイヒンガー作品におけるシオラン受容を取り上げ¹⁷⁾、2004 年以降シオランの引用が継続的に引用されていることを指摘し、そこに Hammerbacher の勧めでシオランを読み始めたこと、そして、癲癇の発作で急逝した Reichensperger の死後、精神的に危機的なダメージを受けたアイヒンガーの癒しとしてシオランの本が支えになっていた事実を明らかにしている。また、その後、Françoise Rétif はアイヒンガーテキストにおけるシオラン影響について、2004 年に刊行されたアイヒンガーの *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* から *Subtexte* までを分析して、シオランのテキストが単なる引用を超えてアイヒンガーのテキストの中に入り込んでいるとの指摘をしている。¹⁸⁾ ここで Rétif は Szöke の主張を踏襲して、アイヒンガーテキストの中のシオラン引用は「書き換え」(Umschreibung)、「変容」(Transformation) と「モンタージュ」(Montage)、そして「複雑な示唆の技巧」(komplexe Verweistchnik) として考えるべきであると述べている。¹⁹⁾ また、論考の

最後に *Schattenspiele* 及び *Subtexte* におけるシオランの引用及び言及箇所を一覧表にして提示し、シオランのドイツ語訳における該当箇所を示している。²⁰⁾ここでは、*Schattenspiele*と*Subtexte*の抜粋が研究対象となっており、*Schattenspiele*においては15箇所、*Subtexte*においては35箇所のシオランに関する言及が取り上げられており、これを見ると2004年に始まったシオランの引用が2005年のテキストにおいてはさらに増えていることが明らかにわかる。この調査では、2005年3月19日までのテキストが扱われているが、単行本に採用されたテキストには、まだ2005年6月18日までに書かれた9編がある。これらのテキストについては、今後調査をする必要があるが、この段階ではおそらく原本についての情報資料が不十分であったため、それが不可能であったと思われる。調査対象となったテキストの中では、*Schattenspiele*に関しては3箇所、*Subtexte*に関しては9箇所もシオランのオリジナル箇所が判明できないとされている。それらの箇所は、アイヒンガーがシオランのテキストを「変容」させて用いているために引用箇所が特定できないのではないかとする主張がここから出てきている。確かにRétifが主張するように、引用としてすぐにそれとわかる箇所以外にもシオランのテキストの要素がアイヒンガーのテキストには随所に反映されていることは容易に考えられる。本論では、これらすべてについての調査は及ばなかったが、*Schattenspiele*について先行研究で不明であった3箇所については、今回の調査で引用箇所がほぼ特定できた。それについては、後述する。

引用箇所については、Hammerbacherはアイヒンガーの手書きのテキストを入力する際に、すべてシオランの原文をチェックしていると述べている。そうであれば、一見、アイヒンガーがシオランのテキストを「変容」したという主張は成立しなくなりそうである。その点について、今回新たに判明した引用箇所を見ながら考察したい。

3. 新たに判明した引用箇所について

*Schattenspiele*の2004年8月12日付けのテキスト *Schattenspiel Radio* の中で、アイヒンガーはReichenspergerが死の床についている病室で流れてくるラジオの音について書いているが、その中に次のシオランの引用が出

てくる。

Eternal activity without action.²¹⁾

英語で書かれているこの引用の原文は

Was immer geschieht, scheint mir verderblich, bestenfalls unnötig. Notfalls könnte ich mich erregen, aber ich kann nicht handeln. Gut, allzugut verstehe ich, was Wordsworth über Coleridge sagte: *Eternal activily without action.*²²⁾

これを見ると、イギリスの詩人ウィリアム・ワーズワースが親友のサミュエル・テラー・コールリッジについて述べた文章の引用であることがわかる。それをアイヒンガーがシオランの引用として本文に使用している。

2004年12月24日に書かれた *Die geförderte Freude* にある2箇所不明であった引用箇所については以下の通りである。

一箇所目は：

Die beiden Frauen, mit denen ich am meisten verkehrt habe: die heilige Therese von Avila und die Erzvergifterin Brinvilliers.²³⁾

これは、シオランの *Gevierteilt* 中のアフォリズムの一節で全くそのままの引用であった。²⁴⁾

二箇所目は：

Je länger er dauert, desto skeptischer beurteile ich meine Ursachen, mich weiterzuschleppen.²⁵⁾ (下線は執筆者による)

この箇所に関しては、非常に似ている文章が見つかったが、全く同じではなかった。

Je länger es dauert, desto skeptischer beurteile ich meine Chancen, mich von einem Tag zum nächsten weiterzuschleppen. Eigentlich war dem immer so: ich

habe nicht im Möglichen, sondern im Unvorstellbaren gelebt.²⁶⁾ (下線は執筆者による)

この引用は、アフォリズムの中の抜粋であることがわかるが、下線部の部分は同じであるが、原文の方は „Ursache“ ではなく „Chancen“ となっており、さらに „mich von einem Tag zum nächsten“ というフレーズがアイヒンガーのテキストでは省略されている。

以上の3つの引用を見ただけでも、アイヒンガーのシオラン引用にはそのまま原文を引用しているものや、孫引き、そして、一部テキストの書き換えが見られることがわかる。

4. シオラン引用箇所に関する Hammerbacher の証言及び今後の課題

Rétif の調査を見ると、*Schattenspiele* に比べて、*Subtexte* の引用の不明箇所の方が多いことがわかるが、今回の調査で、*Schattenspiele* の引用箇所については、一部書き換えがあることを前提に考えれば、すべての箇所が特定できたことになる。しかし *Subtexte* に関しては、まだ不明な箇所が残る。アイヒンガーはそもそもシオランのどの本を読んでいたのであろうか。

2004年9月に書かれた *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein* に掲載されている *Das grüne Märchenbuch aus Linz*²⁷⁾ の冒頭部分に印象的な一節がアイヒンガーのシオラン講読の一場面を表している。

Grell und orangefarben leuchtet E. M. Cioran unter dem noch jungen Kaiser Franz Josef vom grauen Tisch in der Hofzuckerbäckerei Demel. Von den Syllogismen der Bitterkeit über Die verfehlte Schöpfung und Vom Nachteil, geboren zu sein bis zu Geviertelt. »Die Untröstlichkeiten aller Art gehen vorbei, aber der Grund, dem sie entspringen, bleibt immer.«²⁸⁾

この箇所を見る限り、„grell und orangefarben“ と色の描写があることから、アイヒンガーの用いたシオランのテキストは、具体的な版を指していると思われた。Rétif もその箇所については調査をしており、ここにある引用が1979年の suhrkamp taschenbuch 版 *Vom Nachteil, geboren zu sein*. の46ページからの引用であることを特定している。²⁹⁾

そこで、シオラン引用のあるアイヒンガーのテキストを入力した Franz Hammerbacher に直接問い合わせてみたところ、アイヒンガーがコラム執筆時代に熱心に読んでいたシオランのテキストについての回答を得ることができた。全て、suhrkamp taschenbuch 版であった。

- * Vom Nachteil, geboren zu sein (st 549) [orange Schrift vor rotem Hintergrund]
- * Die verfehlte Schöpfung (st 550) [rote Schrift vor gelbem Hintergrund]
- * Syllogismen der Bitterkeit (st 607) [rote Schrift vor gelbem Hintergrund]
- * Gevierteilt (st 1838) [marineblaue Schrift vor himmelblauem Hintergrund]
- * Zersplitternde Gewissheiten (st 3278) [ein Cioran-Lesebuch, auf dessen Cover ein großflächiges Foto des Philosophen reproduziert ist; es zeigt Cioran mit dem Rücken zum Fotografen stehend am Ufer eines Gewässers]³⁰⁾

テキスト中に出てくる色は、引用テキストがある *Vom Nachteil, geboren zu sein* の朱色のカバーにオレンジ色のタイトルを指しているものと思われる。また、Hammerbacher 氏の記憶では、当時、シオランの引用については、彼自身が全てその該当箇所を上記に挙げた版で確認して、入力をしたとのことである。³¹⁾ また、Rétif の文献調査では一部フランス語の原書が用いられているが、アイヒンガーはフランス語でシオランを読んで引用するほどのフランス語力はなかったとのことで、引用は専らドイツ語訳からであることも教示いただいた。

今回の Hammerbacher のリストのうち、はじめの 4 冊については、シオラン全集にもそのまま採用されており、シオランの著作として知られているが、5 冊目の *Zersplitternde Gewissheiten* は、他の 4 冊とは趣が違う版である。Thomas Stölzel と Simone Stölzel によって編集され 2002 年に刊行された本書は、シオランのアフォーリズムを集めたアンソロジーである。今まで、どの研究者からもシオラン引用の原本として認識されてきていないが、この版は、今後アイヒンガーのシオラン引用の原本として、調査対象としなければならない。

また、今回の調査で、*Subtexte* の引用箇所の一つに上記の本以外の *Das Buch der Täuschungen*³²⁾ からの引用も見つかった。この引用箇所については、また別の機会に詳述するが、このことから、Hammerbacher があげた本以外の調査も必要となってくることがわかった。

5. アイヒンガーテキストにおけるシオラン

Rétifも疑問に述べているように、何故、シオランがアイヒンガーの癒しとなりこれほどまでにアイヒンガーを惹きつけたのか。シオランは、極端なまでのニヒリストであり、また、故郷ルーマニアにいた時期にはナチスに賛同していたという政治的な背景について批判も多い思想家である。

アイヒンガーとシオランに共通して見られるのが、生まれてきたことへの否定的な態度、そして短文やアフォリズム形式の文体を好んだ両者の体系的な思想の構築への否定的な態度である。

一つ目の点については、シオランの思想全般を貫くものであるが、その中でも特に *Vom Nachteil, geboren zu sein* の中で生まれてきたことへの嫌悪感ともよべる彼の思想を読み取ることができる。アイヒンガーの作品やインタビューを見ても、特に後期になってくると、生まれてきたことへの否定的な態度が顕著である。

二つ目の点については、二人に共通する非常に短い形式の文章にその態度が顕著に現れている。シオランのテキストはアフォリズムの形式を多く採用しているが、それらの多くは互いに一見すると矛盾するものも多く含んでいる。アイヒンガーのテキストも、年を追うごとに短くなっていく傾向がある。後期の新聞のコラムになってくると、同じエピソードと思われるものが複数のテキストに書かれていることがあるが、その内容が食い違っていることもある。彼らにとっては、その時その時の真実が真実であり、それを敢えて体系の中に合わせて書き換えるようなことを潔しとしないと見ることができる。一つ一つのテキストの中に真実があり、それは人間が変化してゆくように変化して行くものと捉えていると見ることができる。

後期作品が、このシオラン引用の登場によって、どのように変化して行ったのかを考察するにあたり、今回はその転換期にあたる2004年の春から夏にかけての作品に注目してみたい。2003年からアイヒンガーは新しいコラムのシリーズに入っていた。*Schattenspiele* と名付けられたシリーズは、草稿では *Sterbensarten* とタイトルをつけられていたが、新聞に連載されるにあたり変更された。

Schattenspiele, aufgetaucht und lange wieder abgetaucht: Menschen, die am

Rande stehen, die nicht in Zeitung oder auf Partys glänzen. Nur sie bleiben in Erinnerung, sie mit ihren Sterbensarten.³³⁾

これは、2003年11月14日付けのコラム冒頭部分である。タイトルの „Schattenspiele“ という言葉から書き始められているのが印象的である。新聞やパーティなどで輝くことのない隅にいる人間のことを取り上げ、その人たちの死に際の思い出を綴ることが、このシリーズの一つの意図であったことが読み取れる。ちょうど、このシリーズを書き始めて半年ほど経った2004年4月9日に書かれた *Für Richard Reichensperger* という文章を書いていたとき、³⁴⁾ Reichensperger は癲癇の発作を起こし、病院の集中治療室で生死をさまよっていた。

Schatten wechseln, streifen leicht vorbei, lindern, kühlen, aber ihre Möglichkeiten werden von dem bestimmt, der sie wirft. Und noch mehr ihre Spielregeln. Für den Schatten, der heute auf dem Spiel steht, waren die Regeln immer streng, und er vergab sich nichts, ließ sich nicht schleifen. Er sah sein Leben als Geschenk, vor allem »seine« Zeitung = wie er sie nannte =, und blieb doch in jeder seiner Welten für sich und sehr einsam, ohne jede Larmoyanz.³⁵⁾

先ほどの文章と同じ „Schatten“ で書き始められており、同じスタイルで書かれていることがわかるが、「影が入れ替わり、通り過ぎ、和らぎ、鎮まり」という箇所は、それまでの文章の中で死者を影として書いていたことから見て Reichensperger の死を覚悟した文章であると読むことができる。その上で、「影の可能性はそれを投げるものによって定まる。」そして、その「ルール」はさらにその影の持ち主によって左右される。これがアイヒンガーの考える影、つまり死の形である。Reichensperger の自分自身に妥協を許さない厳しい生き方、そして、自らの命を贈り物として捉えていた姿勢、毅然とした人物像が、そのまま彼の影になるのだと読むことができる。

この文章から、自分の生きている世界に影として死者が存在すると考え、生き方がそのまま影となって、他の人の記憶に残ってゆくものとアイヒンガーが捉えていたことがわかる。彼女のテキストそのものが死者を現在に浮かび上がらせる影絵芝居なのである。

その執筆活動と彼女の生活をも全面的に支えていた Reichensperger を失ったアイヒンガーは精神的に大きな危機を迎える。そこへ、シオランの文章を勧められるのである。前章で取り上げたシオランの本の描写は2004年9月に書かれたものであるが、その頃には、4冊の本がアイヒンガーのそばに強い色彩を放って存在していた。この強い色彩の描写は *Schattenspiel* と対比させてみると、影がその本体に合わせてその濃淡やシルエットの明確さを左右されるものとして捉えられているのに対し、ぶれることのない明確な存在としてアイヒンガーテキストを支える存在になっているように見える。シオランの強い断定的な文章と極端なまでのニヒリズムがここではアイヒンガー自身に強烈なインパクトを与え、彼女のテキストに一種の起爆剤として彼女の執筆活動を新たに支える柱となったようである。

まとめ

2004年春から2005年までの約1年間の間のアイヒンガー作品において、シオランへの傾倒は読み解くうえで避けられない要素である。2004年9月のテキストにあげられている4冊の本を中心に、それから翌年の6月までにおそらくシオランに関する本はさらにアイヒンガーの傍に増えていったと考えるのが自然であろう。Rétifの調査はそのことを裏付けている。Hammerbacherの助言では、さらにアンソロジーが一冊読み込まれていたとのことであるが、アイヒンガーのテキスト分析を進める上でも重要な文献である。今後さらに文献学的な調査の上にテキストの分析を進めて行く必要がある。

注

- 1) Ilse Aichinger (1921年11月1日ウィーン生まれ 2016年11月11日ウィーン没) 本稿執筆中に訃報が入った。2016年11月1日はアイヒンガーとその双子の Helga Michie (ロンドン在中の画家) がそろって95歳になり、オーストリアを初めてとして、記念の催しが数多く催されていた最中の訃報であった。家族に看取られた静かな最後だったとのこと。心からご冥福をお祈りします。

- 2) Aichinger (2005)
- 3) *Subtexte* とカフェ文学については、真道 (2016) 参照。
- 4) Richard Reichensperger (1961-2004) は当時アイヒンガーの公私両面に渡るパートナーであった。1991年にFischerから出版された *Ilse Aichinger Werke* の編集者であり、2000年以降のアイヒンガー作品執筆を促し、後期作品群成立に決定的な影響をもたらした人物である。
- 5) Aichinger (1991)
- 6) 1993年に筆者がウィーンでアイヒンガーに会った際も、自作の朗読会は行っていた。そして、まだ執筆もしていると語っていた。
- 7) Aichinger (2001)
- 8) 例えば、*Eddie Constantine* (in: Aichinger (2001), S.98-99) は1998年に執筆、*Sessel für die Aufgeschlossenen*. (in: Aichinger (2001), S.112-113) は2000年6月17日付でErnst Jandlの追悼文である。
- 9) この事件については、Szöke (2010) 参照。当該文章は、2004年12月9日に *Neue Züricher Zeitung* が掲載することになる。(Aichinger (2005), S.169-172)
- 10) Aichinger (2005)
- 11) Shindo (2011a)
Shindo (2011b)
Shindo (2015) 参照
- 12) 2007年1月にDLAは、すでに1980年代から所蔵しているギュンター・アイヒ (1907-1972、イルゼ・アイヒンガーと1953年に結婚) に加えて、アイヒンガーの一次資料を新たに所蔵することになったというニュースをホームページで伝えている。
http://www.aski.org/portal2/cms-askiev-kultur-lebendig/aski-ev---kultur-lebendig-1-07/askiev-deutsches-literaturarchiv-marbach-nachlass-und-vorlass-die-berliner-materialien-von-guenter-eich-und-der-vorlass-von-ilse-aichinger.html&html2pdf_submit=1 (2016年12月3日検索)
- 13) DLAの資料を利用した最初の研究成果は、Roland Berbigが客員編集をして同年2007年7月に発行された *Text und Kritik* の中で、Berbig自らが1945年に書かれたアイヒンガーの日記を紹介し、その *Vorbemerkung* の中で言及しているものであろう。
Aichinger, Ilse; *Aus dem Tagebuch 1945* (*Text+Kritik* (2007) , S.15-18)

- 14) Berbig/Markus (2010)
- 15) 主な研究成果は下記の文献一覧参照
- 16) Hammerbacher (2007)
- 17) Szöke (2010)
- 18) Rétif (2013)
- 19) ebd. S.178
- 20) ebd. S.192f.
- 21) Aichinger (2005) S.149
- 22) Cioran (1991) S.40
- 23) Aichinger (2005) S.173
- 24) Cioran (1991) S.100
- 25) Aichinger (2005) S.176
- 26) Cioran (1979, st.550) S.53
- 27) Aichinger, Ilse: Das grüne Märchenbuch aus Linz. (in: Aichinger (2004)) S.5-8
- 28) ebd. S.5
- 29) Cioran (1979, st.549) S.46
- 30) Franz Hammerbacher からの2016年10月6日付メールから。この場を借りて、Franz Hammerbacher 氏と Reto Ziegler 氏には、筆者の質問に丁寧に答えてくださったことを心から感謝します。
- 31) ebd.
- 32) Cioran (2008) S.163-352
- 33) Aichinger (2005) S.107 (2003年11月14日付記事の冒頭部分)
- 34) ebd. S.135-136
- 35) ebd. S.135

文献一覧

- Aichinger, Ilse: Werke. Frankfurt am Main 1991 (Aichinger 1991)
Aichinger, Ilse: *Der Wolf und die sieben jungen Geißlein*. Wien 2004 (Aichinger (2004))
Aichinger, Ilse: *Unglaubliche Reisen*. Frankfurt am Main 2005 (Aichinger (2005))
Aichinger, Ilse: *Subtexte*. Wien 2006 (Aichinger (2006))
Cioran, E.M.: *Die verfehltte Schöpfung*. Frankfurt am Main 1979 (st 550) (Cioran (1979,

st.550))

Cioran, E.M.: *Vom Nachteil, geboren zu sein*. Frankfurt am Main 1979 (st549) (Cioran (1979, st.549))

Cioran, E.M.: *Syllogismen der Bitterkeit*. Frankfurt am Main 1980 (st607) (Cioran (1980))

Cioran, E.M.: *Gevierteilt*. Frankfurt am Main 1991 (st1838) (Cioran (1991))

Cioran, E.M.: *Zersplitternde Gewißheiten: Ein E.M.Cioran-Lesebuch*. Frankfurt am Main 2002 (st3278) (Cioran (2002))

Cioran, E.M.: *Werke*. Frankfurt am Main 2008 (Cioran (2008))

Arnold, Heinz Ludwig (Hrg.) : *Text+Kritik (175) Ilse Aichinger*. München 2007 (Text+Kritik (2007))

Rabenstein-Michel, Ingeborg/Rétif, Françoise/Tunner, Erika (Hrg.) : *Misstrauen als Engagement?* Würzburg 2009. (Rabenstein-Michel/Rétif/Tunner (2009))

Berbig, Roland/Markus, Hannah (Hrg.) : *Berliner Hefte zur Geschichte des literarischen Lebens*. (9) Berlin 2010 (Berbig/Markus (2010))

Fässler, Simone: *Von Wien her, auf Wien hin*. Ilse Aichingers „*Geographie der eigenen Existenz*“. Wien 2011 (Fässler (2011))

Görner, Rüdiger/Ivanovic, Christine/Shindo, Sugi (Hrg.) : *Wort Anker Werfen. Ilse Aichinger und England*. Würzburg 2011 (Görner/Ivanovic/Shindo (2011))

Fußl, Irene/ Gürtler, Christa (Hrg.) : *Ilse Aichinger »Behutsam kämpfen«*. Würzburg 2013 (Fußl/Gürtler (2013))

Hammerbacher, Franz: *Die Kolumne »Schattenspiele« = Das Buch »Subtexte«* (in: *Text und Kritik* (2007) , S.99-101) (Hammerbacher (2007))

Ivanovic, Christine/Shindo, Sugi (Hrg.) : *Absprung zur Weiterbesinnung. Geschichte und Medien bei Ilse Aichinger*. Tübingen 2011 (Ivanovic/Shindo (2011))

Kubaczek, Martin/Shindo, Sugi (Hrg.) : *Stimmen im Sprachraum. Sterbensarten in der österreichischen Literatur. Beiträge des Ilse-Aichinger-Symposiums Tokyo*. Tübingen 2015 (Kubaczek/Shindo (2015))

Rétif, Françoise: „Von der Unannehmlichkeit, auf der Welt zu sein.“ Ilse Aichinger und Emil M.Cioran: Schreiben aus Ressentiment? (in: Fußl/Gürtler (2013) , S.175-193) (Rétif (2013))

- Shindo, Sugi: *Stolpersteine. Analyse zur Subtextuellen Konstruktion von Aichingers Texten.* (in:Ivanovic/Shindo (2011), S65-77) (Shindo (2011a))
- Shindo, Sugi:*Zusammenklirrende Leben - zusammenklirrende Werke. Gegenreflexionen in den Werken von Ilse Aichinger und Helga Michie.* (in:Görner/Ivanovic/Shindo (2011), S45-56) (Shindo (2011b))
- Shindo, Sugi:*Trotzdem Nein zum Leben sagen. Victor Frankl und Emil Cioran in Texten Ilse Aichingers* (in:Kubaczek/Shindo (2015), S.43-58) (Shindo (2015))
- Szöke, Ildiko: *»...aber unerlässlich ist nur Cioran.«. Die Cioran-Rezeption in Ilse Aichingers Spätwerk: Schattenspiele und Subtexte.* (in: Berbig/Markus (2010) S.174-186) (Szöke (2010))
- 真道杉：ウィーンのカフェと文学ーイルゼ・アイヒンガーの場合ー『日本大学国際関係学部生活科学研究所報告』38号 2016 35-42 頁) (真道 (2016))